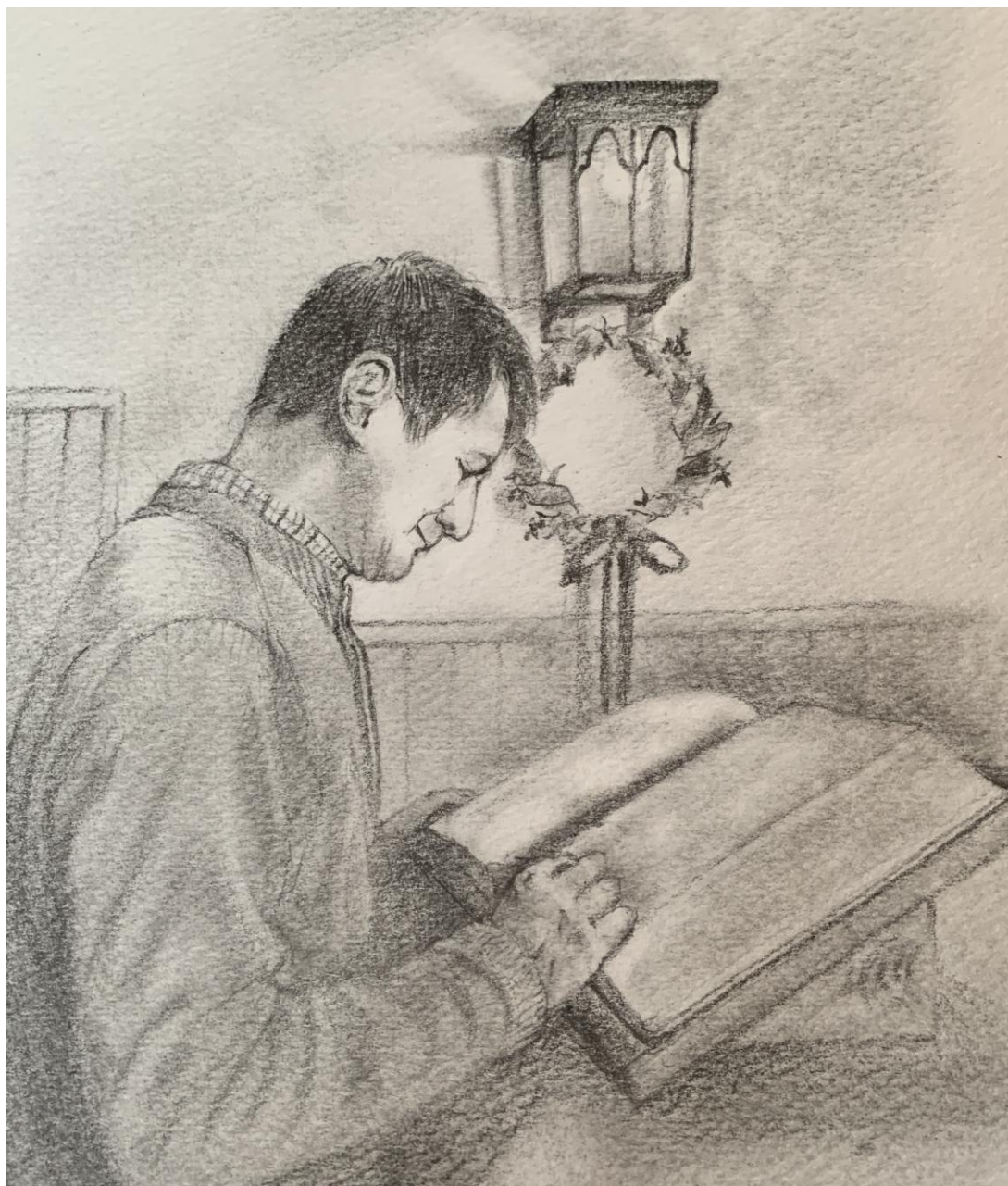


日本基督教団 下関丸山教会 会報

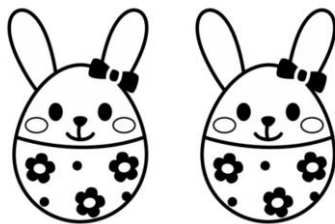
まるやま No.73 イースター号

2026年4月5日発行



会報まるやま 73号 目次

巻頭言『復活の主を見上げ』	餅原 研一牧師	3
『われ思う ゆえにわれあり?』 (信徒講壇日 奨励)	中野 新治	8
『創立記念伝道礼拝 奨励』	松尾 登	11
『癒しと回復』	餅原 恵美子	12
『愛餐会の写真』		15
表紙：『聖書を読む姉川氏』		高山 環



巻頭言

『復活の主を見上げ』

聖書箇所…マルコによる福音書十六章一〜八節

下関丸山教会牧師 餅原研一

二〇二五年度も主なる神の導きの内に、皆様のお祈りとご奉仕に支えられ、教会の宣教活動が行われたことに感謝します。

この一年間はロシアとウクライナ、そしてガザとイスラエルの戦争が終結を見ること無く続き、さらにアメリカとイスラエルがイランに大規模攻撃を開始し、各地で軍事衝突が拡大して死傷者が多数出ています。また地球温暖化による大雨や山火事などの災害が日本でも起きています。そして原油価格の高騰などによる物価高が続き、庶民生活を圧迫しています。このような社会状況の中で、私達の教会は礼拝や教会学校、祈祷会、バイブルクラス、クリスマス



・パイプオルガンコンサートなどを通常通りに行うことができた感謝でした。また教区の会議などはオンラインと併用で開催され、分区の集会や会議の多くは対面で行われました。世界祈祷日や日韓合同礼拝と日韓交流会も、コロナ禍の時のようにに人数などの制限もなく対面で開催されました。また分区主催の教会音楽講習会が今年も当教会で開催され、この一年間も主にある良き交わりの時が与えられたことを感謝します。そして今年度は、かつて礼拝の奏楽のご奉仕を長年された竹村道子姉が六月二七日、九五歳で天に召されました。また今田徹兄の十周年記念式が八月一〇日に執り行われました。この信仰の先達の主なる神の御元で、平安の内におられることを私達は確信しています。

さて教会に集う私達は今年二月一八日〜四月四日の間、

受難節(レント)の期間を過ごし、主イエス・キリストの十字架への苦難を覚えて、自らの信仰を見つめ直してきました。そして四月五日に復活日(イースター)を迎えます。このイースターは春の到来を待ちわびる植物に例えることができるでしょう。イースターは毎年、桜が咲き、新緑が美しい春にお祝されます。この春を告げる植物の生命力に驚かされます。冬の寒さに耐え、すっかり葉を落とし枯れたように見える木々や、姿を消して死に絶えたように見える草花が、春には息を吹き返したように一斉に芽を出し、青葉や花の新たな命を咲かせます。枯れて死んだように見える冬の季節も実は春に備えて、しっかりと芽を出し花を咲かせる準備と充電の期間であり忍耐の時なのです。この植物のたくましい生命の中に自然の力を感じ、自然の背後にある何か大きな摂理の力、つまり神の存在を感じる人もおられるでしょう。

さて聖書では、キリストが十字架に架けられ墓に葬られ復活されるまでの様子を、当時、立場の低くされた三人の婦人を通して書いています。この三人の婦人、マグダラの

マリアとヤコブの母マリアそしてサロメは、イエス様が最初にガリラヤ地方で宣教活動を開始された時から、十二弟子と共にイエス様に付き従って来た人達です。イエス様の神のお話しに心癒され励まされ、生きる希望を与えられて共に苦難を乗り越えて来た仲間です。またイエス様が行なわれた数々の奇跡に驚き、イエス様の人間を越えた神の御業を目の当たりにした証人です。そしてイエス様こそ待ちに待ったメシア、救世主、救い主である。だから自分達の王となつてローマ帝国の抑圧から解放して下さい方であり、「この方に付いていけば間違いない」と思い従つて来たのです。そして一週間前の日曜日、棕櫚の葉を手にしたエルサレムの人々に歓迎され、イエス様と一緒にエルサレムに入城したのです。ところが十二弟子と一緒に最後の晩餐の食事を終えたイエス様は、その夜、ゲッセマネの園で祈られた後、祭司長達の手下に捕らえられてしまったのです。弟子達は捕まることを恐れ、とっさにイエス様を見捨てて逃げてしまいました。そしてイエス様は拷問を受け鞭打たれ罵られ、不当な裁判によって十字架に架けられ苦難

を受けて死なれたのです。さらに翌日の土曜日はユダヤ教の安息日であり、急いで墓に葬る必要があります。安息日には礼拝以外の労働が禁じられていたからです。三人の婦人達は別れを惜しむ間もなく、イエス様は慌ただしく墓に葬られたのです。三人の婦人はイエス様が十字架に架けられ墓に葬られるまでの一部始終を見届けてきました。また弟子達がイエス様を裏切って逃げ去った後もイエス様に付き従ったのです。そして安息日がようやく明けた日曜日の朝早く、日の出と共に婦人達は急いで墓に出かけました。当時の墓は岩に掘られた横穴式の洞窟で、墓の中は四畳半程の広さがあり、墓泥棒に荒らされないように墓の入口は大きな石でフタがされました。婦人達は墓の中に納められたイエス様の傷ついた体に香料を塗って、心から吊りたいという一心で慌てて家を飛び出したのでしょうか。道の途中で墓の入口は大きな石で封印されていることに気づき心配になりました。その大きな石を自分達だけで転がすことが出来ないからです。墓の石を誰が転がしてくれるのかと話し合い、非常に不安になり「どうしよう」と悩んで、

目を伏せて歩いていたでしょう。しかし、ふと目を上げて見ると、何と墓の入り口の大きな石は脇に転がされ、開いているではありませんか。婦人達はイエス様と自分達を隔てる障害物の大きな石にとらわれ、目を伏せ悩みました。ところが目を上げて見ると墓は開けられ、すでに問題は解決していたのです。私達も厳しい現実から目を伏せ、現実逃避したいと思う時があります。しかし現実から逃げても問題は解決しません。人は厳しい現実を目を伏せ、自分の力だけに期待するのではなく、下に伏せた目を上げて人の力を超えた神を見上げ、神に期待し心を神に向けるならば、大きな神の御業が働くことに気付かされるのです。人の力だけではなく、神の力に期待することの大切さを聖書は教えています。しかし婦人達は神の力が働くことに気付かず、イエス様のご遺体のない空っぽになった墓を見て驚きました。さらに婦人達が墓の中に入ると白い長い衣を着た若者が、「驚くことではない。十字架につけられたイエスは復活なさって、ここにはおられない」という重大な事実を告げられて一層驚きました。そして若者は婦人達に、

「イエス様は先にガリラヤへ行かれる」そこで復活のイエス様とお目にかかれると、弟子達に伝えるように告げます。しかし「婦人達は墓を出て逃げ去った。震え上がり正気を失っていた。そして誰にも何も言わなかった。恐ろしかったからである」と書かれています。婦人達は大切なイエス様が十字架で死なれた上に、墓が空っぽになった衝撃で、人間の常識では考えられない「復活」を受け止め切れずパニックになり混乱したのでしよう。大切なイエス様を失った喪失感で正気を失い気が動転し、ただただ恐ろしく、その場を逃げ去る他なかったのです。それ程、イエス様の復活の出来事は衝撃的で、人間の知恵を遥かに超えた出来事でした。復活は人間の力の及ばない、人の常識では説明のつかない神の業だからです。しかし恐れ慄き、逃げ去ったマグダラのマリアでしたが、この後、復活されたイエス様と出会ったのです。そしてイエス様が復活された真の神であるとの確信を与えられたのです。イエス様の復活を確信したマリアの心に希望の光が差し込み、マリアの人生はイエス様によって、絶望から希望に変えられたので

す。さらにマリアは、この復活の良き知らせを喜んで人々に伝える最初の人となりました。マリアが最初に人間にとつての良き知らせ、つまり福音を人々に伝える人となったのです。

さて本日の聖書箇所から私達が教えられることは、私達の人生の絶望と希望の間には、神を信じることを妨げる罪という隔ての壁、障害物があるということです。あの婦人達もイエス様と出会う障害物となったのが墓の大きな石でした。障害物の大きな石のような罪を、人は自力で取り除けずに悩み不安に陥るのです。もはや自分の力では罪を取り除くことは出来ないとい分の罪を認め、罪を贖い清める為に十字架に架けられたイエス様を見上げ信じるならば、私達の罪を神が取り除かれ罪の罰から救われると約束されたのです。教会はイエス様が復活された日曜日に、イエス様の復活を記念する「主の



日」として礼拝を約二千年の長きに渡って守り続けて来ました。主の日にキリストを信じる者は、二千年前に死なれたイエス様ではなく、復活されて今も働き守って下さる生けるイエス様を確信し、礼拝を捧げているのです。聖書は復活のイエス様と出会う必要を教えています。多くの人が暗い墓のような、この世の富や地位、権力を求め、争い傷つけ合い苦しんでいるのではないでしょうか。空っぽの墓は貪欲な罪を表し、この世の富など死の先まで持つて行けない、空しさを意味しています。空しいこの世の貪欲さから目を上げて復活のイエス様に出会うなら、真の希望と救いが約束されるのです。人には不可能に思える問題も、私達の将来をご存じな創造主なる神には、すでに解決された問題です。イエス様は復活の初穂ですから、イエス様の復活を信じる者も同様に死の絶望から復活の希望が約束されるのです。そしてイエス様は今も「さあ、行って、人々に福音を告げなさい」と勧めておられます。私達もあの婦人達のように、暗い墓の中から方向転換して、顔を上げてイエス様に出会い、復活の希望を頂いて福音を伝えることが

出来ますように祈ります。

イースターはキリストが蘇られた日曜日、キリストの復活を覚えて感謝するために礼拝が始まりました。新しい年度がいかなる年になっても、決して変わらない真の復活の神が、私達に慰めと希望と救いを与えて下さることを確信し、感謝して歩んで行きましょう。

最後に「会報まるやま」に寄稿して下さいました皆様、そして編集を担って下さった富田一恵姉に感謝致します。新たな年度も皆様と教会の上に、主なる神のお守りと導きが豊かにありますように、お祈り致します。

信徒講壇 十月十九日

『われ思う ゆえにわれあり?』

中野 新治

今年もまた、余りに暑い夏でした。「うだるような暑さ」だったわけですが、元々は「茹る（ゆだる）」だったようで、そうであれば、「茹でられる卵の気持ちがよく解るような暑さ」を味わっていたことになりました。原因が地球の温暖化にあることは誰もが理解していても、膨大なエネルギーを使い続けることを止めようとはしません。「わかっちゃいるけど止められない」のです。この「思いと行動のズレ」は人間特有のもので、動物には基本的にはないものです。いくら賢いチンパンジーでも、「顔で笑って心で泣く」ことはないに違いありません。人間の喜怒哀楽は、ほとんどこの二つが一致したり、ずれたりして起こると考えてもいいのでしょうか。

この思いと行動の不一致や、過剰な一致による混乱は



様々な精神的な病いや、殺人や自殺などを引き起こし、愚かな戦争にまで行き着きます。しかし、なぜ人間だけがこのような混乱の中で生きているのでしょうか。

人類の歴史を根本から辿った名著『サピエンス全史』（ユラル・ノア・ハラリ著）の冒頭の部分に次のような興味深い記述があります。「人間が二本足で直立歩行できるようになったことは、手の使用を可能にしたことをはじめ、人間が人間となる極めて大きな出来事であった。しかし、直立によって腰まわりが格段に細くなったため、母親の産道が狭くなり、お産が命の危険を伴うようになった。死産や母親の死亡が増えてしまったのである。早産で生まれればこの危険から逃れられたが、その結果、本能をはじめ、自然に備わっているはずの、生き延びるための回路が整わないままの『未熟児』として

生きて行くほかなくなったのである」。

一種の仮説ではあるでしょうが、確かに、体毛もなく、成長に長い時間がかかり、時節を問わず出産し、同一種でありながら殺し合うなど、他の動物には備わっている生き抜くための「自然の摂理」が、人間には欠けています。これをカバーするために言葉が生まれ、それを使うことで集団や社会を維持してきたわけでしょうが、これがまた厄介なもので、言葉によって偽りの世界を作ることが可能となり、混乱はさらに増してしまいます。キリスト教に「原罪」、仏教に「煩惱」という言葉があるのは、人間は自分たちが「自然の摂理」の埒外に置かれていることに早くから気づいていたことを示しているのでしょう。

近代になると、この混乱を理性によって収めようという「啓蒙家」たちが登場します。その代表とも言えるのがデカルトで、その「われ思うゆえにわれあり」という言葉は良く知られています。世界の全てが疑わしいとしても、私が今こうして考えていることだけは疑うことができない、と捉えることで、デカルトは人間の立ち位置を自己の理性

に置きました。ここから近代の科学主義と人間中心主義が始まったとされています。

しかし、「われ思うゆえにわれあり」は本当に可能なのでしょうか。個人の確立を目指す近代社会では、「われ思う」が肥大し、その結果として自分を見失うことがかえって増えているのではないのでしょうか。森鷗外の『舞姫』の太田豊太郎や、夏目漱石の『こころ』の「先生」の「われ思う」ゆえの苦しみは、誰にとっても覚えのあるものに違いありません。しかも、このデカルトの言葉は、クザールヌスという中世ヨーロッパの宗教学者の「神の照覧あるゆえにわれあり」という言葉を下敷きにして作られた、という説があります。クザールヌスが、自己を保証するものを神であるとしたことを、デカルトは自己自身に替えてしまったこととなります。もしそうだとすれば、近代の理性万能の世界の傲慢さをここに見て取ることは十分に可能でしょう。今日読んでいただいた聖書は、「ルカによる福音書」2章28節から35節までの、エマオ途上で弟子たちが復活のイエスに出会う箇所です。「二人は互いに言った。

道々、聖書を解き明かしながらお話しして下さった時、私たちの心は燃えていたではないか」という表現は、二千年後の今も読む者の心に響きます。しかし、デカルトに始まる「理性の光」でこれを照らせば、イエスの復活は科学的にあり得ないこととなります。当然、マリアの処女受胎も、言葉による虚構世界の出来事ということになります。

この問題に最も適切に答えたと思われる人がワイトゲンシュタインです。ドイツ生まれのユダヤ人で、ケンブリッジ大学の教授を務め、論理学、言語学、認識論で卓越した業績を残しました。この理性の塊のような人物は、イエスの復活について次のように述べています。

「もしイエスが復活しないならば、彼は死んで腐る。そしてまた、我々は孤児となり、孤独となる。(中略) 信仰は、私の心、私の魂が必要とするものであり、我々の思弁する知性が必要とする信仰ではない。なぜならば、救われねばならないのは情熱―いわば血と肉を持った私の魂であり、私の抽象的な精神ではないからである」(「断章」)。

人間の世界が知恵と思弁でしか動かないものであるとす

れば、我々は地獄に生きることになる、という指摘は、超越者を失った現代社会の状況を見事なまでに射抜いています。「右の頬を打たれたら左の頬も出しなさい」「罪びとを七の七たび許しなさい」などのイエスの言葉は理性では納得できません。しかし、理性がすべてであることが、結果として、世界を「鬭争のるつぼ」にしてしまうことは紛れもない事実です。私たちの心を燃やし、地獄から救うものこそ、復活したイエス・キリストの存在であり、その言葉の力です。人間には「自然の摂理」は与えられていませんが、それに替わるものとして、「神の摂理」があり、その具体的な現れとしてイエス・キリストが与えられたことを、改めて感謝と共に覚えたいと思います。

(二〇二五、一〇・一九)

創立記念伝道礼拝奨励

十一月十六日

山口信愛教会の教会員・日本国際ギデオン協会副会長



松尾登

※松尾登兄よりいただきました覚書を、ここに掲載いたします。

一九〇四年にビジョンを見せられ、一九二六年に礼拝堂が建てられ、さらに美しいランバス記念会堂が高台に建設されて実に八七年、たくさんの犠牲、大勢の祈りがささげられて、当該地に教会を建てられた神様に栄光を現わさず、今を生きる意味はない。題を「バトンは誰に渡す?」とした所為。

1. 立ち上がった勇士たち

側近の者らが立ち上がり、幼いヨシヤを王位に就けた背景に主が居られるなら、今の「神無き世界」に立ち上がるのはクリスチャンしか居ない。

2. 仲間が与えられて出来たこと

良い知らせのバトンを次に渡すのが受けた者の責任。教会で養いと主の業に参加でき、ここに主が教会を建てられ、私たちを加えてくださった意味がある。

3. それでも止まぬ主の裁きと向き合うに当たって

私たちは罪の世に生きていても、しっかりと主に忠実な生き方がある。罪は決して裁きを免れません。必ず裁きの時は来る。バトンは次に渡されなければならない！

『癒しと回復』

餅原 恵美子

昨年の夏、足を骨折して三ヶ月入院するということがありました。朝ゴミ出しのため、教会の前の道を急ぎ足で歩いていたらマンホールに躓き転倒してしまいました。膝が痛くて立ちあがることが出来ず、心細い気持ちで地面に座っていると近所の方が声をかけてくださり夫を呼んで来てくれました。すぐに病院に行き診察してもらうと、右足が大腿骨顆上骨折のため手術をする必要があると説明を受けました。したがって教会や家の気がかりなことを夫に託し、私の入院生活が始まりました。病室では水が欲しい時、トイレに行きたい時、自分では何も出来ないという歯がゆい

思いで手術の日を待っていました。そして手術後、早速リハビリが始まりました。車椅子でリハビリの部屋まで移動するのですが、まずベッドから車椅子に移るのが難しいのです。ベッドの柵につかまりながら両腕と左足(健足)で体を支えて右足(患足)をベッドから下ろすのですが、思うように右足(患足)を動かすことができず、やっとの思いで車椅子に乗り移ります。そして車椅子を自分で動かしてリハビリの部屋までスタッフと一緒に行くのです。廊下の角の曲がり方やエレベーターの乗り降り、車椅子の操作に慣れるとトイレに行く時、食堂に行く時、車椅子が私の足になつてくれて楽しい気持ちになりました。骨折した右足は手術後、体重をかけることが出来ないため左足(健足)に負担がかかりリハビリが進まないこともありましたが、手術から四週間が経ち、右足(患足)に体重をかけていくリハビリ

が始まりました。体重計を使って自分の体重の三分の一、二分の一、三分の二、全体重を段階的にかけていくリハビリです。私は平行棒につかまりながら、おそろおそろ右足（患足）を体重計に乗せていきます。しかし、足に体重をかける感覚がつかめません。足を踏み込んで体重をかけているつもりでも体重計の目盛りは動いてくれません。リハビリスタッフから、姿勢をまっすぐにして、左足（健足）を浮かせてと声を掛けてもらい、ようやく体重計の目盛りは動き始めました。そして三週間が経ち、体重をかけていくリハビリが終了すると、いよいよ歩く練習です。歩き方のリハビリでも私は苦戦しました。車椅子生活を楽しんでいた私は歩き方を忘れていました。平行棒につかまりながら床にかかとを着ける、次に足裏を着けて、つま先で床を蹴る、じんわりと体重移動しながら平行棒の中で足を前に進めて

いきます。歩く練習を始めて三日後、車椅子から歩行器にステップアップすることができました。

このようなりハビリが続く中、私は誕生日を迎えました。病室で迎える誕生日は少し寂しいものだと思っていました。家族や友達から誕生日のお祝いメールや手作りカードが届き、リハビリスタッフの皆さんからも「お誕生日おめでとうございます」と声を掛けて頂いて、人の温かさが身に染みだす忘れられない誕生日になりました。

そして、神様に守られている平安がありました。それは骨折して立ち上がることや歩くことの困難をあじわい、もうできないと、ため息をつく私に、神様が寄り添ってくださり、私の苦痛を引き受けてくださったからです。私の心に平安を与え回復へと導いてくださった神様の恵みに感謝いたします。



すると主は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。

コリントの信徒への手紙十二章九節



みんなで食事をしながらおしゃべりするのが、

教会の楽しみのひとつです。



日韓交流会では、市内7教会がお食事しながら交流
します。各教会のお料理自慢が腕をふるったお料理
がいつも楽しみ。



マナの会と永眠者記念礼拝の時の昼食です。

村田さんのボルシチは、丸山教会の名物です。

そして、恵美子さん、しらゆり会の皆さま、いつもありがとうございます。

皆でわいわいと作る盛り付けやお皿洗いも、楽しい時間です。

〈編集後記〉

富田 一恵

会報まるやま七三号を、今年も発行できましたことを、心より感謝します。二〇二五年は、転倒による骨折により長期入院をされた方がお二人も出ました。そのうちのお一人、餅原恵美子さんに闘病記を書いていただき、感謝します。厳しいリハビリの時に、神さまの寄り添いを感じられたという内容に大変励まされました。

お二人とも、今は回復されています。神さまのお守りに心より感謝します。

わたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。

(コリントの信徒への手紙二 四章一六節)

会報まるやま 73号 (イースター号)

2026年4月5日

〒750-0019 下関市丸山町 4-1-8

Tel/Fax (083)222-5931